

2021年8月18日 23:02 <http://www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202108182302323>

## タリバンのアフガニスタンをどうみるか 国際協力 NGO 活動者の視点

大野和興

米軍の撤退で瞬時に全土を掌握、政権を奪回したタリバンが、これからどのような存在になるのか、さまざまな報道が乱れ飛んでいる。日本のメディアはタリバン極悪説が支配的で、ネガティブな報道が目立つ。しかし、長年アフガニスタンに駐在し、人々の暮らしの再興に現地の人々と一緒に働いてきた日本の NGO の中には違った見方が出ている。国際協力 NGO 日本国際ボランティアセンター（JVC）は米軍侵攻直後から現地に事務所を置き、医療や女子教育などに尽力していた。当時筆者も JVC 理事の一員として、その活動を注視してきた。アフガニスタンの人々と関わり続けている当時のスタッフの見方、視点を紹介する。（大野和興）

谷山博史（JVC 前代表、アフガニスタン現地事務所長）さんはアフガニスタンの人権 NGO のタリバンに対する動きを紹介しながら、「報道では相変わらず過激派タリバンだの、女性の権利が抑圧されるだのと判で押ししたようなことしか言いませんが、タリバンに対する私たちのマインドセットを変えない限り和平もなければ、タリバンが住民を人質に凶暴化するのを防ぐことも出来ないのです」と述べている。

そして、「私がアフガンで活動していた時、タリバンより米軍のほうが怖かった。米軍がスタッフの母親を銃撃した時私は米軍に乗り込んで談判しました。そこに若いサビルラがいました。今サビルラは当時の私よりずっと賢明な仕方です。タリバンと対話しようとしているのです。そし

てそんなことが地方の現場ではできているのです」という。

<https://www.facebook.com/profile.php?id=100045364272632>

また、2005年から12年までアフガンの現場で活動した長谷部 貴俊（JVC 前事務局長）さんは、米国などいわゆる先進国が当時のアフガニスタンで何をしてきたかを振りかえる。

「2005年から12年までアフガンの現場に入り、ありがたいことに今もさまざまなアフガンの人々とつながり、彼ら、彼女らの悲しみをみてきました。明らかにアメリカの目的はアフガンに欧米的な民主国家、さらに言えば自分たちに都合のいい国家を建設することだと思っています。アメリカはじめ、欧米諸国はさまざまな開発プログラムや「普遍的である」と西欧が信じる選挙制度の支援に巨額の支援をしてきていました。」

長谷部さんは続けて「2008年ごろをピークとして、欧米の軍隊が多く的一般人を殺害してきたアフガンの現場の悲しみをみてきました。また、地域社会システム、文化を蔑ろにした欧米はじめとする政策に、憤慨する長老たちと会ってきました。アフガンのこの20年は、単なる軍事的な失敗だけでなく、日本を含めた過去20年の諸外国の取り組みそのものが失敗だったのだときちんと認識するところしか、次は始まらないと信じています。」と語る。

長谷部さんはさらに続けて、現在滞在中のイラクのアルビルで読んだサバルタンスタディーズの大家、パルタ・チャタジー氏が2001年9・11の10日後にコロンビア大学で学生に語った講演録の一節、「私たちが目のあたりにすることになるのは、おそらく、いつものアメリカの傲慢さと暴力と無神経さであろう。悲しいことだが、たぶん、20世紀に起こった多くの戦争と結局何

もかわることがないものとなるだろう」を引用しながら、「これはアメリカだけでなく自衛隊をインド洋派遣をするなどしてアメリカに賛成した日本にもつきつけられた大きな大きな課題です」と結んでいる。

<https://www.facebook.com/takatoshi.hasebe.5>

2021年8月19日 16:08 <http://www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202108191608014>

## タリバンとは何者か 欧米による「悪」のイメージと日本のNGOが見たもうひとつの顔

永井 浩

アフガニスタンのタリバンの復権を受けて、本サイトは欧米や日本のメディアで流布するタリバン像に異を唱えるNGO「ペシャワール会」の現地代表、中村哲医師の見方を紹介した。つづいて、やはり同国で長年、人々の暮らしの再興に現地の人びとと一緒に働いてきたNGO「日本国際ボランティアセンター」（JVC）スタッフの見方も紹介した。いずれも、悪の権化というタリバンのイメージには否定的である。もうひとり、旧タリバン政権誕生以前からアフガンの人びととつきあってきたNGO「宝塚・アフガニスタン友好協会」（兵庫県宝塚市）代表の西垣敬子の見方にも耳を傾けてみよう。（永井浩）

### ▽大国介入のなか、「人びとはみな必死に生きている」

西垣の話は、米軍がアフガン空爆を開始し、日本政府が米軍支援のために海上自衛隊をインド洋に派兵したとの決定を受けて、2011年10月24日の毎日新聞（夕刊）に掲載されたものである。

西垣のアフガンとの出会いは、1993年に在日アフガニスタン大使館で開かれた写真展だった。79年に侵攻したソ連軍に抵抗する農民ゲリラや負傷した子どもたちの痛ましい写真に衝撃を受

け、宝塚で大使館から借りた写真の展示会を企画した。東部ジャララバードで避難民が増えていると聞き、40万円を集めて、翌94年11月に初めて難民キャンプを訪れた。

国連と提携しているアラブ系NGOが入国に協力してくれた。地平線までつづく避難民のテントに西垣はぼうぜんとする。赤ん坊のミルク代とかんがえていた募金は、学校用のテントと文房具にあてた。「赤ちゃんはみんな、夏に死んでしまった」と言われたからだ。

その後、パキスタンで手回しミシンを買っては、難民キャンプで裁縫教室を開いたり、イスラムの赤十字「赤新月社」の困窮者施設で、ソ連軍のロケット弾で右足と家族を失った少女のために、奈良市の義足装着者に作製してもらった義足を届けたりもした。少女のいる施設には、目のまえで夫や家族を殺され、精神を病んだ女性たちも暮らす。「私をドイツに連れて行け、そうしたら病気は治る」と大声でわめく女性、一日中イスラムの祈りをつづける女性。そのかたわらで、貧しい食事を一匹の猫と分け合って食べる老女。電気もなく、夜は真っ暗になった。

彼女は毎年ほとんど一人でアフガニスタンに入り、ジャララバードを拠点に、女性の「隠れ学校」や孤児院などを支援してきた。学校では、国

語（パシュトゥン語とダリ語）と算数、コーランの授業が行われている。納屋の片隅を教室に、周辺に住む小学生から中学生くらいの子が集まってくる。西垣は教師たちの月給 1000 ルピー（約 2000 円）を支給してきた。その数は 2 人からはじまり、22 人まで増えていた。

ある日、西垣は高等裁判所の判事宅に呼ばれた。裁判所の奥に住宅があった。裁判所の入口には銃をもったタリバン兵士が 4、5 人いた。恐る恐る部屋に入ると、なんと子どもがたくさん勉強していた。ここもじつは、隠れ学校だった。「私は思わず笑ってしまった。タリバンだって自分の子どもに教育を受けさせたいのだ」

西垣は、強盗やレイプが横行するなかで、銃を携帯した兵士 2 人を雇ったこともある。タリバンが勢力をもちだした 1996 年ごろになると、タリバンが武器狩りをしたために、治安はよくなった。「タリバンは嫌だが、前はもっとひどかった」というのが一般の人たちの思いだったという。だから、米軍の爆撃に呼応した北部同盟のカブール進撃は「時計の針を戻したよう」に見える。「北部同盟が勝ったとしてもさらなる混乱が始まるおそれがある。ゲリラが横行した以前のアフガニスタンにもどってしまうのではないか」と心配だ。

「アフガン人はみな必死に生きている。現地に行くと逆に励まされて帰って来る」という西垣だが、カブール爆撃の報道を聞いたときに、少女たちがどんなに怖い思いをしているだろうかと想像する。この年も、3月にジャララバード、5月にはカブールを訪れている。アフガニスタンは 30 年ぶりの大干ばつに見舞われ、すでに大量の難民が出ていた。

米国のブッシュ大統領は 2001 年の 9・11 同時多発テロを受けて、国際社会に「テロリストと文明のどちらにつくか」の踏み絵をせまり、テロとの戦いを宣言、タリバン政権打倒をめざしてアフガニスタン攻撃を開始した。小泉政権は米軍を後方支援するため、インド洋に海上自衛隊を派兵した。日本のマスコミも、「野蛮」なタリバンというイメージにもとづいて政府の「国際貢献」を

支持した。

だが西垣は、テロリストにつくか、米国につくか以外の選択肢が日本にはあるはず、と考える。「日本は唯一、利害関係のない国。日本の出番と思うが、私だけではどうしようもない。人脈をもち、仲介役できる政治家が日本にはいない」と嘆く。

#### ▽難民の群れから誕生したタリバン

アフガニスタンでは 1989 年にソ連軍が撤退、ソ連に支援されていたナジブラ社会主義政権が反政府勢力の大攻勢で 92 年に崩壊したあとも、権力争奪をめぐる反政府勢力間での激しい戦闘状態がつづいた。戦火を逃れた若者たちの多くは、隣国パキスタンの国境地帯にアフガン人のムラー（イスラム指導者）やパキスタンのイスラム原理主義政党が設けた難民キャンプで、日々をすごした。

キャンプには何十校ものマドラサ（イスラム学校）があり、かれらはそこでイスラムの経典コーラン、預言者ムハンマドの言葉とシャリーア（イスラム法）の基礎を、わずかに読み書きができるていどの教師たちの解釈によって学んだ。教師も生徒もだれ一人、数学、科学、歴史あるいは地理の正式な基礎知識をもっていなかった。かれらは古代から大国の思惑に翻弄されつづけてきた自分の国の歴史、ソ連に対する聖戦の物語さえ知らなかった。アフガニスタンの歴史とタリバンの誕生に精通したパキスタンのジャーナリスト、アハメド・ラシッドは、そのような若者たちを「歴史の浜辺にうち寄せられた海の漂流物のように、戦争が投げ捨てた」存在と表現している。

1994 年、かれらのなかのパシュトゥン人の神学生らが、内戦で疲弊した社会の「世直し」をめざす武装勢力タリバン（パシュトゥン語で「神学生」）を結成する。指導者の多くは内戦で身体障害者となっていた。最高指導者のムラー・ムハンマド・オマルはロケット弾の爆発で右目を、ナンバーツーのハッサン・レマーニは片足を失っていた。「タリバン幹部たちの傷跡は、150 万人の死

者を生み、国土を荒廃させた二十年間の戦争をい  
つも思い出させる」と、ラシッドは書いている。

国民の期待とパキスタンの支援をうけたタリ  
バンは、北部同盟など他の軍閥勢力を駆逐して快  
進撃をつづけ、98 年秋までに首都カブールをは  
じめ国土の九割を実効支配するにいたった。彼ら  
はシャリーアの独自の解釈によって、きびしい国  
内統治を進めた。軍閥の資金源となってきた麻薬  
の原料のケシ栽培の撲滅にも乗り出した。犯罪者  
を公開処刑し、女性には就労と勉学を禁止し、全  
身をすっぽり隠す伝統衣裳ブルカの着用を強制  
した、と欧米や日本のメディアで報じられた。あ  
らゆる種類の娯楽、音楽、テレビ、ビデオ、トラ  
ンプ、凧揚げ、そしてほとんどのスポーツとゲー  
ムが禁じられたという。米国同時多発テロが起  
こるすこし前の 2001 年 3 月には、偶像崇拜を禁  
じるイスラムの教えに反するとして、中部バーミ  
ヤンの石窟群にある大石仏像を爆破した。

こうした行為は欧米諸国や国際社会から、人権  
を抑圧して世界的な文化遺産を破壊する狂信的  
政権との批判をまねくようになる。そして 9・11  
を機に、ブッシュ米政権は対テロ戦争の第一弾と  
してタリバン政権打倒に乗り出す。

▽カブールは「陥落」したのか「解放」されたの  
か

タリバン政権の崩壊とともに、欧米や日本のメ  
ディアには「解放を喜ぶ」首都カブール市民の光  
景が報じられた。ペシャワール会の中村は、日本  
に帰国中の講演で「素直に私たちも喜んでいいの  
か」という聴衆の質問に対して、「非常にいい質  
問です」とつぎのように答えた。「じつは、西側  
報道とは裏腹に、アフガニスタンはタリバン政権  
以前の無秩序状態に戻ったのです」

中村は 9・11 まで、カブールにしょっちゅう  
出入りしていたから市内の実情はよくわかって  
いる。「タリバンがいなくなると、野菜が市場に  
出るようになりました」という報道について、野  
菜がないと生きていけないから、野菜はずっとあ  
ったのを知っている。「テレビが売られるように

なりました」というが、テレビは前年からこっそ  
り売られていた。タリバン政権が禁じていた凧揚  
げができるようになったという風景が映し出さ  
れるが、以前から凧遊びはアフガン中でやってい  
た。

新聞やテレビで伝えられるタリバンのイメー  
ジと、中村が日ごろつき合ってきたタリバンの実  
像との落差も少なくない。女性は教育を禁じられ  
ていたというが、西垣も訪れた「隠れ学校」があ  
り、ユニセフを中心に女性のための学校教育がお  
こなわれていた。カブールだけで数十ヶ所があり、  
タリバンの子どもたちがいることもある。

では、「カブール解放」を喜ぶ人たちは何者な  
のか。アフガニスタンにかぎらず、途上国全般に  
あてはまることだが、首都はその国のなかで一部  
だけ近代化された別世界であり、ほとんどの人た  
ちはそれ以外の貧しい農村部に住んでいる。カブ  
ールも例外ではない。アフガン全体が巨大な田舎  
国家でありながら、ここだけはミニスカートが流  
行ったりする西洋化した街なのだ。「アフガン人  
でありながらアフガン人とはいえないような」ご  
く一部の特権階級の富裕層はタリバン撤退を歓  
迎するだろう。そうでなくても、これまでいくつ  
かの武装勢力にほんろうされてきた民衆は権力  
者への身の処し方をこころえている。旗をいくつ  
か用意して、タリバンが来ればタリバンの旗を、  
北部同盟が来れば北部同盟の旗、米軍が来れば米  
軍の旗を振る者も出てくるだろう、と中村は観察  
する。

それから 20 年後の今年 8 月 15 日に、タリバ  
ンはカブールを制圧、米国主導で日本などの先進  
諸国の後押しで発足した親欧米派のカルザイ政  
権の後継ガニ政権は崩壊した。「カブール陥落」  
とともに国外脱出を図ろうとする人びとが空港  
に殺到する光景が映し出された。メディアには、  
タリバン復権後のアフガンについて識者や専門  
家の声が並んでいる。いずれも、タリバンへのネ  
ガティブな見方が強く、新政権の前途に警戒や懸  
念が優先している。日本はどうすべきなのか。

カブールはタリバンの制圧で「陥落」したのか、それとも「解放」されたのか。それを判断するにはアフガンの人びとの声を聞かねばならないが、

私はかれらと同じ人間として長年汗を流してきた日本のNGOの人たちのタリバン像を信じたい。

2021年8月15日 16:37 [www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202108151637240](http://www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202108151637240)

## マレーシア映画『夕霧花園』 日本の侵略戦争への怒りと赦し

永井 浩

戦後76年の8月15日、追悼とともに戦争と平和をかんがえる情報が新聞、テレビ、書籍から多く流されている。だが、同じ戦争で日本の侵略を受けたアジアの人びとが、戦争の傷をかかえながら戦争と平和にどう向き合ってきたのかは、ほとんど伝えられない。東京を皮切りに全国上映されているマレーシア映画『夕霧花園』は、阿部寛ら各国俳優の静かな熱演をつうじて、戦争でこころの傷を負った加害者と被害者の男女が、それと葛藤しながらお互いに愛し合い、自己の解放と相手への赦しに至っていく姿を描き出している。

### ▽謎の日本人庭師と侵略犠牲女性のラブストーリー

第二次世界大戦が終わって間もない1950年代のある日、女性弁護士をめざすテオ・ユンリンは、カムロン高原の奥地で日本庭園「夕霧花園」の造成に取り組む中村有朋をおとすれる。亡き妹テオ・ユンホンの夢をかなえるためだ。

ユンリンは戦前、訪問先の京都で見た庭園の美しさに魅了され、いつか自分も庭園をつくりたいという夢を抱くようになった。だがその夢は、1941年の真珠湾攻撃の直前に英領マラヤに侵攻した日本軍によって奪われた。日本軍は各地で中国系住民を「抗日分子」として虐殺、強制労働させ、若い女性たちを慰安所に送り込んだ。ユンリンも日本兵の性の奴隷となった。日本軍は敗戦とともに証拠隠滅のため、強制労働などの現場を焼き払い、彼女も炎に巻きこまれた。



姉のユンリンはかろうじて逃げ延びることができたが、妹を見殺しにしてしまった後悔の念に苛まれ、日本への憎しみを抱きながらも妹の夢を叶えたいと決心する。

中村は、皇室付庭師だったがテニスコートを作るのを断って職を失ったとされるが、一方でマラヤで日本軍のスパイ活動をしていたという噂もある、謎の人物である。戦後も帰国せず、マラヤの奥地で造園に打ち込んでいる。ユンリンは妹の夢を実現するために日本庭園を造ってほしいと中村に頼むが、彼は拒否する。だが中村は、現在

造っている夕霧花園で自分の見習いをしながら庭造りを学ぶことを提案する。

彼女は屈強な男性労働者たちとともに、汗水流しながら造園の力仕事の日々を送るようになる。

日本軍が去ったあとのマラヤでは、植民地再支配をめざす英国と独立をめざすマラヤ共産党との戦いが激しさを増し、庭園にも共産党ゲリラが押しかけてくる。

そのような緊迫した状況下でも、多くを語らず黙々と造園作業を指揮する中村に、ユンリンはいつか惹かれるようになる。いっぽう中村は、日本占領下のユンリン姉妹の過酷な体験を知るようになる。ユンリンは、中村が打ち込む造園の奥にある日本文化の精神、彼が口にする「借景」の意味を自分なりに理解しようとする。二人は庭造りに力を合わせるなかで互いに愛し合うようになるが、それはユンリンの妹の夢を叶えたいという願いで結ばれている。中村は加害者として戦争で負ったところの傷、ユンリンは被害者として負った戦争の傷を癒し、おなじ人間として赦しを乞い、赦しを受け入れることをつうじて、和解と再生の道を歩もうとしている。

中村は庭園がほぼ完成したある日、散歩に出かけると言ったまま、ユンリンの前から姿を消してしまう。

それから 30 年後の 1980 年代、マレーシアとして独立した国の連邦裁判所判事をめざすユンリンは、かつて愛し合った謎の日本人庭園師が残した夕霧花園を再訪する。歳月をへても置かれた石はそのままだが、草木の成長でその佇まいは微妙に変化している。そこで彼女は、借景の意味をあらためてかみしめるとともに、中村が自分の身体に残した、妹ユンホンの夢に託した思いがけない日本文化の形を発見する――。

### ▽「借景」が問いかけること

原作はマレーシアの作家タン・トゥアンエンの小説「夕霧花園」。世界的に権威のある英国の文学賞ブッカー賞にノミネートされ、邦訳が近く彩流社から刊行される。

映画は制作会社がマレーシア、監督は台湾のトム・リン、俳優陣はヒロイン役のマレーシア出身のリー・シンジェ、日本人庭園師の阿部寛、晩年のユンリン役のシルヴィア・チャンは台湾の女優・監督。ほかに、脇役の植民地統治者の英国人役は何人かの英国俳優が固める。スタッフをふくめ 9 か国の人びとが制作に参加している。

こうした多彩な顔ぶれは、多民族国家マレーシアの姿が反映しているといえよう。マレー人、華人、インド人、先住民族、英国人から成る同国は、1963 年の独立後も各民族の融和による平和的な国づくりに試行錯誤を重ねてきた。

トム・リン監督は多国籍チームによる映画づくりは初めての経験といい、こう語っている。「多民族国家のマレーシアにいろんな国のスタッフ、いろんな国の役者が集まって、このような映画を作ることができたのはとても有意義なことだったと思います。全員が映画に対する理解とプロフェッショナルな才能を持っていて、彼らが“映画”を共通言語に力を合わせたからこそ、この映画が完成しました」

同監督はまた、戦争というデリケートな題材をあつかう映画に込めた基本姿勢についてこう述べている。

「映画をとおして昔の傷口をえぐり、さらに多くの痛みを与えるような真似は決してしたくない。この物語の核心は、愛があればどんな悲劇も乗り越えることができるというメッセージですから、映画のなかで誰か特定の人物を――たとえそれが戦争犯罪者であっても――何かものすごい化け物のような、あるいは鬼畜のように描いたりしたくはありませんでした」（「夕霧花園」パンフレット）

中村有朋を演じた阿部寛も、この難しいキャラクターに英語で挑戦しようと思ったのは、トム・リン監督のこのようなメッセージに共感したからだという。そして、この映画のキーワードともなっている「借景」についてこう述べている。「人工物のない庭先に、石が置いてある。ああ、これが借景かと。奥行きのある場所では石が浮い

て見え、幻想的で。そして立つ位置によって見え方が違う。この映画では英国、マレーシア、日本とそれぞれの国のおのおのの傷を受けているけれども、それも角度によって異なって見えてくる。作品の意味することが、つかめた気がしました」（8月2日付毎日新聞）

雄大なキャメロン高原を戦争という自然空間として、それを借景しながら目の前の日本庭園に静かに佇む石や木々。ひるがえって、戦後76年の間に、日本の映画で侵略された側の歴史と文化まで理解しようとしながら、戦争とは何かを深く問う作品がどれだけあったらどうか。ない、とすれば、それはなぜなのか。

映画のラストは、「夕霧花園」はまだ完成していないことを暗示している。だとすれば、それをどのように完成していくのかは、私たち一人ひと

りに課せられたこれからの挑戦いかにかかっているのではないだろうか。そしてそのためには、中村とユンリン、ユンホン姉妹の苦しみと葛藤と愛の力を忘れてはならないだろう。

だが新聞、テレビは、今夏も例年のごとく8月ジャーナリズムの花盛り。いつまでたっても、内輪の体験の語り継ぎが中心で、おなじ戦争をアジアの隣人がどう語り継いでいるかには関心なさそうだ。

「夕霧花園」は2020年の大阪アジア映画祭のオープニング作品として上映され、上映後には客席から拍手が巻き起こった。

待望の日本国内公開は、東京はすでに終わり、各地で順次上映される。だが東京でも再上映される機会があるかもしれないし、私は毎年8月15日前後に繰り返し上映してほしいと願っている。



主人公のユンリン演じるマレーシア出身の女優リー・シンジェさん(左)と日本人の庭師、中村有朋を演じる阿部寛さん



出演者らと話すトム・リン監督(手前)